

おにき まこと
鬼木 誠

君は立川流を見たか

●自治労・書記長

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

本年が皆さんにとって健やかな一年となりますことを心よりご祈念いたします。

昨年、この原稿を書くにあたって、ラグビーワールドカップの話題を避けた。元々ラグビーが大好きでワールドカップの日本開催を心から喜び、観戦中は購入した記念ボールを常に胸に抱き日本の活躍、歴史的快挙に涙した。

私の中では、2019年の大きなトピックであった。が、当時すでにワールドカップ、そしてラグビーは多くの人によって様々な切り口で語られており、もはや書くべきことがないと感じた。いや、ないわけではないのだが、読まれる方が食傷気味ではないかと考えた。せっかくならあまり人が書きそうにないことを書こう。今回のテーマを選ぶにあたっても同様の思考が働いた。昨年の最大のトピックは何と言っても新型コロナウイルス感染症である。従って、その話題は避けることにした。

ということで、立川流の話をしたい。今年には立川談志師匠が亡くなって10年となる。

初めて生で師匠の落語を聞いたのは40年前。まだ見目麗しき高校生の時だった。年明け間もない時期、場所は福岡市民会館。演者は、柳屋小三治、三遊亭円楽、そして立川談志。当時、生で落語を聞く機会が少なかった福岡で、これだけの面子が揃うのはかなり珍しかった。テレビで観る落語は古典であれ新作であれ極端に短く、ビデオもそこまで普及

していなかった時代、一席丸ごと聞くためにはカセットテープしかなかった。だからこの落語会を本当に楽しみにしていた。

当日は若手の開口一番はなかったと記憶している。小三治師匠の「小言念仏」に始まり、円楽師匠の「たらちね」と、とにかく面白かった。まくらも秀逸で、生の落語の楽しさを存分に味わった。最後が談志師匠演じる「紺屋高尾」。先の二人の師匠にはまことに申し訳ないが、桁が違っていた。そう感じた。心底感動した。これほど物語に引き込まれるものか。生の落語、立川談志の凄さを思い知った。かくして私は、落語と二度目の出会いを果たし、談志信者となった。

幸い、その後、談志師匠は定期的に福岡で独演会を開催するようになった。「寝床」「居残り佐平治」「包丁」「芝浜」などなど、いずれも素晴らしかった。通常立川流の独演会は弟子の開口一番の後、本人が一席演じ休憩、その後もう一席というパターンだが、談志（面倒なのでここから敬称略）の場合、まくらが長くなり一席目の漸がほとんどないこともあった。

ただ、このまくらがすこぶる面白い。時事ネタ、落語論、人物論、古い映画や音楽の話、客の技量を図るように段々落ちを難しくする小漸、全てが「これが立川談志だ」という主張。その内容に100%の同意はできないのだが、彼は同意を求めてはいなかったのだろう。「落語は人間の業の肯定」と言っていた彼は、



演目だけでなくまくらにおいても、自分も含めた「人間」について「人間の業」について語っていたのだと思う。

談志の落語を生で聞くことはできなくなったが、弟子たちが立川流を支えてくれている。中でも、志の輔、談春は素晴らしい（生志の名前を挙げないのは小中学校の同級生に甘い判定と思われたくないから。志らくを加えないのは好きじゃないから）。兩人とも「最もチケットが取れない落語家」と言われているが、とにかく一度聞いてほしい。YouTubeにいくつもの動画が上がっているが、是非独演会に行ってほしい。ただし、東京以外の独演会にしていだきたい。チケット抽選のライバルを増やしたくない。

ライバルと言えば、談春と志らくの話の一つ。ライバルであり、お互いをよく思っていないであろうこの二人がほぼ同時期に福岡で独演会を行ったことがある。先攻は志らく。この時の「らくだ」に面食らった。元々破天荒な噺だが、志らくはさらに輪をかけて、終盤はさながらスプラッターコメディだった。志らくらしき全開。こんな「らくだ」は聞いたことがない。なるほどと思った。

その1週間後に、談春の独演会。今日は何を聞かせてくれるだろうと期待していたら、まさかの「らくだ」。これがまた聞いたことのない「らくだ」だった。よもや「らくだ」

で泣くとは思わなかった。これまた談春らしい。素晴らしかった。その高座を終えた談春が、「1週間前に志らくが『らくだ』やったんだってね。かぶったね。知らずに演ってごめんね」とのたまった。絶対に嘘だ。知らなかったはずがない。志らくが福岡で「らくだ」を演じたのを聞いて、俺の「らくだ」はこうだとわざとやったに違いない。相当意識し、相当嫌ってることを改めて知れて、なんだか嬉しくなった。

志の輔の話を書く紙幅はないようだ。談志が「俺より上手い」といった人だから間違いない。古典も新作も抜群に面白い。新作なら「みどりの窓口」、古典なら「徂徠豆腐」などはどうだろう。きっと志の輔を好きになる。

思えば好きな人情噺には冬の噺、師走の噺が多い。「芝浜」「文七元結」「鼠穴」「中村仲三」も忠臣蔵関連だから冬の噺にしておこう。陳腐な表現だが、寒い時期だからこそほんわかした気持ちになりたいというのは人情だ。正直に生きていれば、いいこともあるよ。きっと来年はいい年になるよ。というメッセージは単純に過ぎるかもしれないが決して嫌いじゃない。

さあ、年の初めに「芝浜」でも聞いてあったかくなろうか。そして今年も正直に生きよう。色んなことはあるだろうが、それでも世の中はそう捨てたもんじゃないはずだ。